

東京 100 年の記憶

松山 巖（評論家・小説家）

対談＝**松山 巖**×**松隈 洋**（建築史家・京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授）

[日時] 2019 年 5 月 11 日（土）14:00～15:30

[会場] 高島屋史料館 TOKYO 5 階旧貴賓室

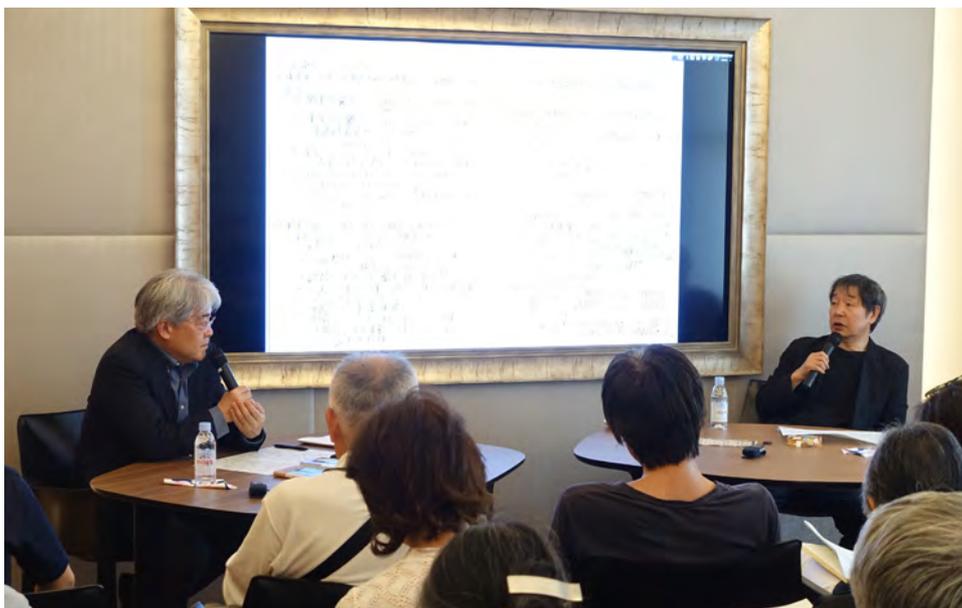
かつて建築家でありながら評論家、小説家に転身した松山巖氏が、生まれて育ったまちの思い出をもとに、東京の 100 年を振り返ります。そこで浮かび上がるのは東京を変えた四つの事件。自身の小説さながらに、想像もつかない出来事が、古い世界を破壊し、新しい世界を創造してゆく、都市の現実を語ります。



松山 巖（まつやまいわお）／評論家・作家

1945 年東京都生まれ。1970 年東京藝術大学美術学部建築科卒業。卒業後は友人と建築設計事務所を設立し住宅設計に関わる傍、執筆の仕事も行う。その後、事務所を畳み執筆に専念。1984 年に『乱歩と東京——1920 都市の貌』（Parco 出版、1984 年）で日本推理作家協会賞受賞、1993 年に『うわさの遠近法』（青土社、1993 年）でサントリー学芸賞、1996 年に『闇の中の石』（文藝春秋、1995 年）で伊藤整文学賞、1997 年『群衆——機械のなかの難民』（読売新聞社、1996 年）で読売文学賞受賞、その他にも多くの著書を発表している。

東京を変貌させた四つの事象



まず僕の生まれについてお話しします。1945（昭和20）年7月に親が疎開した東京都世田谷区の経堂で生まれ、すぐに港区の愛宕町へ戻り、そこで育ちました。愛宕は虎ノ門から10分程。今回はその「虎ノ門からすぐのところに住んでいた」という視点での話が言葉のはしばしに出てくると思います。東京の100年を語る上で、東京が変貌を遂げるきっかけになった大きな出来事は四つあります。一つ目は1923（大正12）年9月1日に起きた関東大震災。後ほど詳しく説明しますが、11時58分という昼時に起きたこの大きな震災により、東京は大きく変貌しました。二つ目は東京大空襲。1945（昭和20）年の3月10日。それまで何度も東京は空襲にはあっているのですが、この後の戦後復興の動きこそが、今の東京の骨格につながっています。三つ目は東京オリンピック。僕が大学に入る前の年のことです。1964（昭和39）年10月10日、異様に晴れた日だったことは今でも覚えています。実は僕は直接見に行かなかったので、テレビで観戦した覚えがあります。この時日本橋の上に建設された高速道路が景観を醜くしているという話もありますが、四つ目は特定街区制度*、つまり都市再生特別地区や都市再生緊急整備地域の政策が始まったことです。今なお超高層ビルがどんどん建てられ、僕の住んでいた虎ノ門近くも建設ラッシュ。なぜこんなことが起きてしまっているのか？これが四つ目の課題です。大きく分けてこの四つの出来事によって、東京がこの100年でいかに変貌を遂げてきたのかについてお話ししたいと思います。

*特定街区制度——都市計画法による地域地区の一つ。建築基準法の容積率や高さ制限を適用せず、都市計画法で別に容積、高さなどを定める制度。1961（昭和36）年創設。超高層ビルを建設するために整備された手法。

関東大震災

まず一番目に挙げた関東大震災についてお話しします。関東大震災は六回ほど震源地を移した大きな地震でした。最初の震源地は小田原です。東京、神奈川、静岡の三都県に渡って大きな被害を与えました。ちょうど正午というところだったために多くの家庭が食事の準備で火を使っていたことと、能登半島に間近に迫っていた台風の風の影響もあって、地震で潰れるよりも火災による焼失の被害が大きかったのです。正確な被害者数はわかりませんが、死者は 10 万人とも、被災者は 100 万人とも言われています。東京のその後の骨格を成したのは震災後の復興計画でした。この時、内務大臣に任命されたのが後藤新平。彼が一気に復興計画をつくったんですね。ところがいろんな反対があって結局彼が思ったことの十分の一もできなかったんじゃないかと思えますけども、かなり一生懸命になって復興計画を練りました。



新橋駅前における関東大震災前後の様子 [出典：『関東大震災記念：新旧対照』大成社、1924 年]

1. 震災前 2. 震災後

たとえば区画整理。当時路地のような細い道ばかりだったものを 4m 幅以上の生活道路に整備したり、雨天時にはかなり歩きにくかった道路の舗装を行いました。大きな問題として道路の整備。それから橋、河川。火事が大きくて火が強いので、みんな橋に逃げたんですね。でも火災で落ちた橋もあった。ともかく橋は重要だということがわかりました。江戸時代から明治にかけてほとんどが木造でしたが、鉄製の橋に切替えたのがこの時代です。当時つくられた橋には駒形橋、蔵前橋、新大橋、清洲橋などがありますが、鉄製にすると同時に橋の両側に荷揚げの場所



関東大震災の救援物資が荷揚げされる芝浦港
[出典：『東京府大正震災誌』東京府、1925 年]

と公園と交番をつくりました。なぜ荷揚げ場所をつくったかということ、救援物資を運ぶためです。当時一番多かったのはアメリカからの救援物資ですが、東京湾から陸路で荷物を運ぶのが難しいので、水路を上がってきて荷揚げをしていたんです。震災の経験上、荷揚げ場は絶対必要。暴動が起きたので交番も必要。それからトイレもつけました。随分昔に街を歩いた時には、トイレや公園が残っていた橋がありました。

小学校や中学校はほとんどが木造でしたが、震災をきっかけに 52 の小学校を鉄筋コンクリートで復旧、建替えました。僕が出た虎ノ門近くの〈西桜小学校〉も当時つくられたものでした。小さな小学校で校庭には 100m のコースもつくれないほどでしたが、銀座の〈泰明小学校〉とつくりが似ています。二つとも震災後にできたいわゆる復興小学校*だったためです。設計は役人が行っていたが、かなり自分の好みが出ているようなところがありましたね。そのころだと新しいデザインを目指す「ゼセッション」「分離派」と言われる動きがあるのですが、それに近いデザインが見られました。

それから避難所としての公園をつくりました。一時避難する場所ですね。三大公園と言われる隅田公園、錦糸公園、浜町公園、そしてその他に小学校の隣に小さな公園が多くつくられました。橋と同じです。これは復興のための一番大きな動きとして六年かけてやったんですね。

*復興小学校——関東大震災後に、復興事業の一環として建てられた小学校の総称。多くは、当時の最先端技術を駆使して建設された。



〈西桜小学校〉

【出典：『東京市教育施設復興図集』勝田書店、1932 年】

もう一つ、一連の同潤会アパートに代表される不良住宅再生事業など、鉄筋コンクリートのアパートも建ち始めました。僕も『乱歩と東京——1920 都市の貌』（松山巖著、Parco 出版、1984 年）を執筆する際に随分歩いて見て回りました。数自体は少なかったですが、鉄筋コンクリートづくりのアパートに暮らすというような、新しい暮らし方が始まったのは震災後のこの時期でした。

新しい暮らしといえば、たとえばデパートを土足で歩くことはこれより前まではしなかったんです。下足番に下駄や草履を預けて足袋で歩く。それをやめたのが、震災少し前の明治末から大正初め。デパートだけじゃなく、呉服屋さんも以前は客が行くと反物広げて売っていましたが、ショーウィンドウのように商品を並べて飾るスタイルになり、それによって街並みもつくられるというように大きく変わってきます。



〈同潤会青山アパート〉 [撮影：志岐祐一]



1. 明治後期の高島屋店内 [出典：高島屋『新衣裳』93号、1910年]
2. 三越呉服店陳列 [出典：『東京風景』小川一真出版部、1911年]

関東大震災について語り始めるとキリがないんですけども、とにかくその後の東京の骨格をつくりました。「降る雪や明治は遠くなりけり」と中村草田男が詠んでますけど、ほんとに大震災によって変わってしまった。たとえば谷崎潤一郎は新しい東京が嫌になり関西に移ってしまったりと、文化人にも大きな影響を与えたと言われています。あるいは被災によって関西に逃げた人が伝えたのが「おでん」ですね。関西では「関東炊き」と言いますが、単に震災があったということだけじゃなくて、道路の骨格と新しい建物と、暮らし方が随分変わりました。もう一つ言うと、お寺が随分移転させられました。道路をつくらなきゃいけないので。本来下町の墨田区にも随分お寺がありましたけど、郊外へ移転させられました。お寺の住職はそれまで近隣の人たちの人生相談にのるなど、本来檀家との距離が近かったのですが、今は距離があります。

暮らしや文化の面でも大きな影響を与えたのが関東大震災だったと言えます。

東京大空襲

二つ目は東京大空襲です。1945（昭和20）年3月10日。アメリカが考えた焼夷弾による空襲は、木造の日本家屋に火を放って燃やす作戦でした。

当時の東京都の役人が話していましたが、終戦直後はやることがなかった。せいぜいできるのは瓦礫を片付けること。しかしその瓦礫を運搬する車の燃料すらないために近くの川に捨てていたそうです。そんなことから戦後の復興は始まりませんでした。さらにその方が言うには、川や水路を埋め立てた陸地を企業に売ってしまったんですね。そのため後で随分行政が苦労したんじゃないかと思いますが。それから川や水路はみな下水道化してしまいました。

それから戦後を代表するのは闇市ですね。戦後の光は新宿から始まったと言われています。闇市の元締めはテキヤがNHKのクイズ番組に出たくらいのスターでしたから。僕は終戦の年の7月に生まれたのですが、かすかに闇市の様子も記憶があります。ただ大人たちが楽しんでいるところという記憶ですが。進駐軍が占領している間は、夕方になると露店が銀座に並んでいました。そこにはアセチレンガスの灯りがあって、いろんなものが売られてるわけですね。

小さい露店がいっぱいあったのをまとめた、丹下健三さん設計の復興マーケットも見に行きました。ちょっとコルビュジエ風の建物でした。1945（昭和20）年からしばらくの間はお金もなく、関東大震災後の復興計画でできたものを食いつぶしていったような時代です。闇市やマーケットもいろんなやり方がありました。池袋の闇市は規律正しく組織されていました。闇市は今若い人が研究対象にしていますので、いろいろな本が出ています。



1. 1946（昭和21）年、新橋駅から見た新橋市場の西側部分 [提供：昭和館]



2. 新橋の闇市での光景。イワシのような魚を焼いている [提供：昭和館]

東京オリンピック

三つ目は東京オリンピック。この時期はとんでもなく忙しい時代でした。開催が決まるとすぐに閣議決定され、高速道路を急いでつくることになりました。道路整備が必要なのです。川と水路は所有者がいらないからタダです。そこで川の上に、さらに日本橋の上にも高速道路が載ってしまう事態になりました。そうしないとオリンピックに間に合わないんです。青山通りを拡幅したのもこの時です。

当時の様子について、池田信さんという方が『1960 年代の東京——路面電車が走る水の都の記憶』（池田信（写真）・松山巖（解説）、毎日新聞社、2008 年）という写真集を出しています。日比谷図書館の職員だった方です。彼は東京が変わっていくことが気になったんですね。そこで毎日のように写真を撮り溜めていました。そして川がどんどん埋め立てられていくことに危惧を覚え、川沿いの変化をずっと撮り収めて行きました。当時の様子がわかる大変貴重な写真集です。

高速道路だけでなく、新幹線を通ず計画もスタートします。実はインフラ整備費は、会場建設よりも遥かにお金がかかったのです。『東京百年史』（東京百年史編集委員会編、東京都、1972-1973 年）という本によれば、事業費の八割は郵便貯金、厚生年金、国民年金、簡易保険などを担保にしたのです。国民が将来のためにコツコツ貯めたお金を使ったわけです。

これによって東京の街は大きく変わりますが、本当の変化はオリンピックが終わった後に起こります。東京に人やクルマが集中し、都心にビルが大量に建ち並び、私の家の近くにも霞が関ビルが建ち上がりました。急激に人が増えたので、朝のラッシュ時には地下鉄に乗れない程でした。新宿の浄水場跡地に超高層ビルが建ったのもその流れです。このころ、震災の復興小学校はなくなりました。仲の良い友達も引っ越してしまい、僕の周りの環境はガラッと変わってしまった。



毎日新聞社

1. 日本橋の上を走る高速道路
2. 池田信（写真）、松山巖（解説）『1960 年代の東京——路面電車が走る水の都の記憶』毎日新聞社、2008 年

特定街区制度

四つ目は特定街区制度です。今なんで超高層ビルがどんどん建っているのか？オリンピックの影響だけじゃなくて、制度が変わったからです。それまでは日照権が守られて、日が当たらなくなるといけないと言われていたんですけど、そんなの無視。ともかく開発しようという制度です。高密度に開発すると決めた地域は、高さの制約を緩くしようというものです。「都市再生整備地域」と言われて、これに指定されることで、超高層のビルが建ち並ぶようになりました。

僕の家の前にも虎ノ門ヒルズが建ち、僕の旧家のあった場所にも 52 階の高さの高層ビルが建ちつつありますし、東京タワーの高さを超えるビルも計画されています。この 100 年のなかで、せっかく関東大震災を機に基盤整備や道路整備

されたものを、逆に食い散らかしているのが今の東京ではないかと感じます。人口は減っているのになぜあんな大きなビルが必要なかわからないのです。このように 100 年の間に東京はずいぶん変わったけど、果たしてこれでいいのかなと感じます。



超高層ビルが建ち並ぶ東京の街並み

対談＝松山 巖×松隈 洋 東京 100 年を振り返る

松山巖の見た東京

松隈 | 松山さんの暮らしや、当時のことがわかるものがあればお見せいただけますか？

松山 | 僕の実家は石屋なんですね。親父はフランク・ロイド・ライトが設計した〈帝国ホテル〉の建設の仕事もしました。父はまだ 18 歳くらいだったのかな。うちにお稲荷さんがあったんですね。そこにあった、関東大震災で焼けたお賽銭の写真です。もう一枚の写真は、戦時中に米軍が飛行機からバラまいたビラです。「欲望から自由になりなさい」というようなプロパガンダです。これは家族の誰かが



1. 焼けた 10 円玉硬貨



拾ったものですね。戦後も宣伝ビラがよく撒かれていました。今交通量の多い道でビラなんて拾っていたら危険ですが、当時はよく宣伝ビラをヘリコプターで撒いてました。

松山 | 戦後、私の家の周りは、虎ノ門まで家が燃えて、とにかく原っぱばかりでした。そこに土管が積まれてました。上下水道のためです。終戦の時にはうちから虎ノ門までずっと何もなくて、電話線だけがずっと向こうまで続いていたと父は言っていました。霞ヶ関に残された建物は文部省くらい。今の外務省の辺りの原っぱで僕はバッタ捕りをしてました。ものすごく捕れたんですね。最高裁のような古い建物もありましたけど、霞ヶ関一帯はまだ仮の建物だったんじゃないかな。

松隈 | 松山さんのご実家の石屋さんはお父さんの代からですか？

松山 | いいえ。戦前に亡くなったじいさんの代からです。戦後、石屋は儲かったんです。今木造の住宅はコンクリートで基礎をつくりますが、昔は「沓石(くつし)」という石を置いてその上に柱を立てます。戦後の東京は焼け野原。家を建てる仕事はいくらでもありました。今は構法が変わり、石屋の出番はなくなり、うちは悲惨な人生です…… (笑)。

松隈 | お父様は「愛宕 (あたご)」の地名を残そうと働きかけていたそうですね。

松山 | そうですね。当時の地名変更はひどいもんです。どこがどこかわかんなくなっちゃいましたね。残ってるのは「四谷」くらいじゃないですか。うちの近くの新橋には親父の関係でめ組の頭がいました。「七軒町」の頭がいて、なんで覚えているかという、釣り竿をもらったんですね。隅田川からお台場へ行ってそこでハゼ釣をやる。「愛宕町」は残りましたが、あとは全部「虎ノ門」になりました。琴平町や明舟町、あの辺りはかつて船が入ってきたとこだとわかるんです。古い町名を残しておけば、ここは水が来るような埋立地だから危ないってわかるんです。それが町名を変えてしまったためによくわからなくなっているのは大きな問題だと思います。

浅草の三社祭は春祭りです。浅草神社に祀られている二人は漁師。つまり浅草は漁師がはたらく町だった。春祭りのあるところは漁師町、盆踊りをやる秋祭りの地域はだいたい田畑を耕しているところというように、だいたいわかるんです。僕のところは愛宕山の愛宕神社の例大祭で秋祭り。

松隈 | 今度の 2020 (令和 2) 年オリンピック・パラリンピックのために、霞ヶ丘アパートの人たちが立ち退かなければならなくなった時、「こんな一等地に住むなんて贅沢だ」という見方をする人もいましたが、松山さんの住んでいた場所ってそれどころじゃなくて、今考えると東京のど真ん中ですよ。

松山 | たまたまそういうところに住んでいただけで、一等地も何もないですよ。映画『ALWAYS 三丁目の夕日』の舞台はまさに自分の家の辺りだと思います。主人公は自動車の修理工ですが、ちょうど僕の小学校の友達で家が儲かっていたのが二人いるんですけど、二人とも自動車修理工場のうちです。あの映画で実際と

違うのは銭湯がないこと。夕方になると銭湯に行って遊ぶんです。そこでよくおじいさんに怒られる。うちの近くに二軒ありましたね。ちょっと歩くといくつもあった。今は数も減ってしまいました。

松隈 | かつては東京のど真ん中にも、ごく普通の暮らしがあった時代ですね。昭和 30 年代は「あの時代は良かった」と美化されがちですが、たとえば東京タワーが目の前で建てられていくのを見てどう感じていましたか？

松山 | 東京タワーなんて行くもんかと思っていました（笑）。通っていた中学校の校庭の目の前に建ち上がりました。子供心にエッフェル塔の真似に見えて、「いつも日本人は真似ばかり」と思っていました。一度だけ、雪が降った日に東京タワーに上ると雪景色が見れるんじゃないかと思って行きました。でも展望室に上がったら、まだ吹雪いていて外は何も見えなかった（笑）。

松隈 | 日本で最初の超高層ビルである〈霞が関ビル〉のときはどうでしたか？

松山 | ビルというより大きな壁ができてしまった。大変なものが出てしまったという印象でした。

松隈 | 霞が関ビルができた年に、帝国ホテルは取り壊されましたが……。

松山 | 僕は子供のころ日比谷公園に遊びに行ったので、フランク・ロイド・ライトの古い帝国ホテルも見ていましたが、実際に自分が泊まるわけでもないので特に意識していませんでした。日比谷公園では魚釣りをして遊んでいたんで、ホテルの池の魚も釣りたいくらいにしか思っていませんでした。

松隈 | そうですか（笑）。確か谷口吉郎は、〈鹿鳴館〉が捨て置かれて廃墟になっているのを見て、現在帝国ホテルの玄関が移築されている「明治村」をつくろうと決意したんですよね。また、当時はまだ走っていた路面電車も、交通渋滞の緩和のための地下鉄に変わっていくころでした。当時は地上の街を覚えていた時代だと思いますが、今は地下鉄の駅の名前を言ってもそこがどんな場所か地上のイメージがわからないですよ。

松山 | 僕も今はほぼ地下鉄で生活していますからね。バスに乗ったりするのもいいかもしれない。

松隈 | オリンピック開催の時代は「夢のような街ができる」と言う人もいましたが松山さんは？

松山 | 興味はありましたが、お金を払って見に行くことはなく、テレビでは観戦していました。市川崑さんの『東京オリンピック』は印象に残っている映画です。

松隈 | あの映画もすごいですよね。街を取り壊すシーンから始まり、聖火リレーでは京都の木造の街並みを通っていく。東京や木造の街並みが変わっていく様子を記録に残そうとした映画ですよ。1970（昭和 45）年の大阪万博の時にも松山

さんは独特の経験をされたそうですが？

松山 | 万博の時には、お祭り広場の大屋根の上から定点観測をする流動調査というのをやっていました。丹下健三さんの研究室にいた曽根幸一さんは、僕の先輩であり先生でもある方で、その人からの紹介でオープン前日からアルバイトでやっていました。一週間くらいアパートに寝泊まりして、動く歩道の定点写真を撮って、人の流れを記録していました。人気のアメリカ館など、人が多すぎてパニックにならないように。

松隈 | 上から見た万博の印象は？

松山 | アメリカ館やソ連館も面白かったけど人が多すぎて、それよりもチェコ館などのほうが面白かったのを覚えています。そのころは建築家になりたかったので、建築物はいろいろと見に行きましたよ。オランダの建築家 T.B. バケマの建物など有名な建築家のものは見ていました。



とある家族の記念写真。当時は全国から大勢の人々が万博会場に足を運んだ
[提供：flick studio]

小説に描かれる東京

松隈 | 松山さんの作品のなかには、街にいろいろな商売があって、いろいろな音が聞こえてくるような時代だったと思うのですが、それは今どのように変わってしまったと思いますか？

松山 | 虎ノ門の辺りは、昔は骨董屋さんが多かった。あとは芝家具と言われる家具屋さんや珈琲屋さんも。それはなぜかと言うと、明治以前から江戸城近くに大使館や公使館が多くつくられたためです。大使館などができると外国人が周辺に多く住むようになりますが、椅子に座れるような場所は少なかった。そのため、外国人のために椅子をつくる木工所が多くありました。今でも有名な天童木工も実は芝にあったんです。

また、神谷町あたりまで骨董屋さんも軒を連ねていました。それも、日本に住む外国人がお土産に骨董品を買って帰ったためです。その骨董屋さんたちはオリンピックの際に今の青山の骨董通りに移ったのです。

松隈 | お話を伺うと、松山さんはまさに生き証人ですよ。『まぼろしのインテリア』（松山巖著、作品社、1985年）では、街が記憶できないという話を中心になっていますが、今お住いの場所ももう記憶できるような場所ではなくなっていますよね。

松山 | すぐ景色が変わってしまって記憶できません。新しいビルができてもその前に何があったか思い出せないですね。

〈ホテルオークラ〉がある場所は昔、大倉喜八郎の庭園だったのですが、塀に隙間があってよく忍び込んで昆虫採集をしていました。伊東忠太が設計した大倉喜八郎の自邸には大きな回廊があって、その景色は新橋駅のプラットフォームから見えました。

松隈 | 松山さんが生きてきた時代の、東京の手触りがなくなってきているのでしょうか？

松山 | 今は随分いろいろなものが偏っているように思います。一時住んでいた、成城学園には柳田國男の家が残っていて、田畑がありました。随分田舎に来たなと思いました。また、今はないですが踏切がありました。今は高級住宅街になりましたが、昔は広い畑が広がる風景でした。

松隈 | 20世紀をトレースするなかで、『群衆——機械のなかの難民』（松山巖著、読売新聞社、1996年）というすごい本を書かれています。名の通った人ではなく「民衆」に焦点を当ててみようと思った理由はあるのですか？

松山 | 面白いと思っただけですね。その作品は読売新聞に頼まれて書いたもので。作家の日野啓三さんは、会った若い連中みんなに「小説を書け」と言うんですよ、その中にはデザイン評論家の柏木博もいました。同い歳の作家、池澤夏樹も日野さんに口説かれて書いた作品ですぐに芥川賞を受賞していましたが。

日野さんは本当にいろいろな人に小説を書けと言う人でしたが、言われた通りに小説を一つ書いたら、今度は「読売のシリーズものの手伝いをしろ、小説は二年ほどやめとけ」なんてことも言われましたが……。ものを書くことになってからいろいろと考えるうちに「群衆」という存在が出てきたと思います。「こんなに生身の人間がたくさん出てくる生臭い作品でいいのだろうか」とも思いました



松山巖『群衆——機械のなかの難民』
読売新聞社、1996年

が、そうしたら政治・歴史学者の北岡伸一さんに「自分は自民党をテーマにもっと血みどろなものを書いているんだからいいんだ」と言われました。

これでいいのかと思いつながら書いていたら、賞をいただくこともありました。

松隈 | 執筆するときに都立中央図書館や日比谷図書館に通って当時の新聞を一枚一枚見たそうですね。

松山 | どういう事件が当時起こっていたのか、三面記事なんかが面白いんですよ。先ほど話した同潤会青山アパートが空き家になっていることなんかも書かれています。つくったにも関わらずなんで空き家になっているんだろうと興味をもって調べてみると、いろいろなことがわかりました。値段が高くて住めないことや、周りの環境と乖離があったりとか。

金のない人は虐げられてきたのです。東京は差別がないと言われますが、実際はそうじゃないんですね。

東京のいいところをどう残すか

松隈 | 東京の 100 年や都市の変化を東京のど真ん中で見てきたなかで、『乱歩と東京——1920 都市の貌』（松山巖著、Parco 出版、1984 年）にも書かれていたように、匿名性が高くなる世界、「都会」としての東京も松山さんは見てこられましたよね。

松山 | 戦前は借家や借地に住む率が高く七割近かったと思いますが、持ち家政策で郊外に住む人が増えて、東京の真ん中は人が住む場所ではなくなってしまったのだと思います。

地主は苗字帯刀を許されている分、責任があり、お祭りの世話をしたりもしていました。明治になってからは七分金制度もなくなりました。

松隈 | 昔は東京にいてもそれほど経済感覚が厳しくはなかったと思いますが、今は全てがお金勘定の世界に変わり、街も変わってしまいましたよね。

松山 | 江戸時代は、とにかく日本橋が中心でしたから、よく江戸っ子は「芝で生まれて、神田で育ち」と言われますが、実はその最後に日本橋で店に出すという商売人の夢を語っているのです。

松隈 | 日本橋高島屋は、関東大震災で東京支店が燃えてしまった日本生命と、1930 年代の都市の成熟期に日本を代表する百貨店をつくりたいという思いで建設の計画が始まりました。しかし、度々戦争で中断されてしまったという印象が強い。もしかしたらあり得たかもしれない、当時目指していた「成熟した都市」のヒントが隠されているのではと思うのですが。

松山 | 震災後、アメリカからの救援物資によって日本はアメリカナイズドされていきました。モボ、モガがダンスをやり始める時代。銀ブラが生まれたり、日本



橋ではなく銀座に中心が移っていく時代でした。関東大震災の前後でその様子は全く違いました。

昔は盛り場と言えば浅草でしたが、それも渋谷新宿に中心が移りました。

松隈 | 松山さんが習った吉村順三さんも両国の呉服屋の息子で、関東大震災前の東京を知っている世代として、江戸情緒を大事にしようとした建築家ですよ。

松山 | 個人的に吉村さんがそうだったという印象はあまりないですが、吉村さんより少し上の芸大教授の吉田五十八先生は奥さんが芸者さんで、きれいなお弁当をつくったと先輩たちが語っていた記憶があります。変な話ばかりですみません(笑)。

松隈 | 松山さんはご自身が見てきた街の記憶を記した本をたくさん書かれていますが、その街が消えつつある今、それを次の世代にどう伝えていったらいいのか。幸田露伴などの松山さんが引用している小説家の文章から僕たちが過去を読み解くこともできますが、2000(平成12)年を過ぎてから激変を続ける現実の都市を目の当たりにすると、何を守っていけばいいのかがわからなくなってしまいますよね。

松山 | 地球温暖化やヒートアイランドといった環境問題の視点から見てもおかしいと、友人とも研究会を開いたりしましたが、政治の世界も開き直っていて、議論は景気の話にすり替えられているように思います。

ホテルオークラも建て替えています。とんでもない高層ビルがどんどん増えていますよね。環境問題も完全に無視されているように思います。

ヨーロッパはそういった意味でもとても規制が厳しいですよ。さらには教会よりも高いものは失礼として高層ビルは建てません。超高層ビルが並ぶ景色はアメリカナイズされたアジア圏にしかないのです。古い文化を大切にする感性が欠けてしまっているのだなと思います。

松隈 | 終戦時、一番高い建物は 60m ほどの国会議事堂だったんですよ。全体を見た上で、「ここでやめよう」というブレーキを誰もかけられなくなってしまっていると思います。錬金術のようにお金が投資できればやってしまう。結果的にみんなのハッピーになる選択ができていないんです。築地市場も残せば世界遺産に成り得たかもしれない。短いタームでものを考えすぎていますよね。築地市場もかつては日本橋にあったものが関東大震災で壊滅し、その復興事業として築地に移転した経緯があります。その時点では、復興を機に「燃えない街をつくろう」という復興文化の精神がありましたが、阪神・淡路大震災や 3.11 の後には復興文化があったと言えるでしょうか？建物が記憶する、その時代の人は何を守ろうとしたのかという「復興の精神」を受け継がなければと思います。松山さん、最後に東京で定点観測をしてきた立場から一言お願いします。

松山 | 「何がいいのか」は僕も判断はできないけれど、今の東京は狭い土地のなかに高い塔をつくってぎゅうぎゅう詰りに育てているようなものですよ。自然とはかけ離れてしまっていると思います。

松隈 | みなさん一緒に考えていきましょう。ありがとうございました。